

# 金が出ずに、なしの産まれた話

小川未明

青空文庫



ある金持ちが、毎日、座敷にすわつて、あちらの山を見ていますと、そのうちに、

「なにか、あの山から、宝でも出ないものかなあ。」というような空想にふけりました。

その山というのは、あまり高くはなかったが、形がいかにもよかつたのです。

ちようど、そのころ、旅の技師が、この村を通つて、

「この山には、銅がありそうだ。」といったといううわさを金持ちにはききこみました。

「やはり虫が知らせたのだ。毎日、自分はあの山を見てみると、

なにか宝たからがありそうな気がしてならなかった。」

ある日、金持かねもちは、金かねづちを腰こしにさして、山やまへ出でかけてゆきま  
した。そして、山やまの中なかに、頭あたまを出だしている石いしを、コチン！ と打う  
つては、欠かいてみました。すると、ぴかっとして日ひの光ひかりに、金こんじ  
色きにかがやくものがまじっていました。それから、夢むちゆう中ちゆうにな  
つて、あたりに落おちている石いしを割わつてみたり、拾ひろい上あげて、日ひに  
さらしてみたりしますと、どれにも、なにかぴかぴかと光ひかるもの  
がはいっていました。

「銅どうばかりでなく、金きんが出るかもしれない。」

金持かねもちは、もう頭あたまの中なかは、宝たからを掘ほりあてたときの喜よろこびでいつぱ  
いになって、考かんがえ顔がおをしてもどつてまいりました。

それから後のことです。

「地主さんのまくらもとへ金の仏さまがお立ちになつて、山を掘れとおっしゃった……。」「とか、

「だんなさまが、お座敷にすわつて、あちらを見ていなさると、山の方で、金の仏さまが手招きなさつた……。」「とか、村にはいろいろの話が持ち上がりました。

三人の熟練した坑夫が、北の遠い島から、呼ばれることになりました。

「さあ、宝を掘りあてて、大金持ちになるか、貧乏をして、裸になるか、運だめしだ。力のつづくかぎりやってみよう。のるもそるも人間の一生だからな。」

かねも  
金持ちは、ついひまなものだから、ちよつとした空想が、大  
きなことになつたので、自分ながらあきれましたが、もう、その  
ときは、村の人たちもたくさん仕事に雇われて、働いていました。  
島からきた、三人の坑夫は、めいめいいうことがちがつていまし  
た。

「この山には、銅も、銀も、金も、鉄もあるけれど、まだ、年が  
若い。」と、一人がいました。

これを聞いたかねもは、

「年が若いそうだが、もう、何年ばかりたつと、ちようどよく  
なるかな。」とたずねました。しかし、これは、木や、人間の  
ようなものではありません。坑夫は笑いながら、

「五千年から、一万年ばかりですかな。」といいました。金持

ちは、頭あたまを振ふつて、

「それじゃ、孫まごの代だいの役やくにもたたない。」と、ため息いきをついたの  
です。

「いや、若いわかことはないだろう。百尺しやくばかり掘ほり下さげたら、いい  
鉤こう脈みやくにぶつつかるような気きがするが。」と、一人ひとりの坑夫こうふは、  
自信じしんありそうにいいました。

そこで、その事業じぎょうにかかることになりました。

いままで、さびしかつた村むらは、急きゆうに活気かつきづいて明あかるくなり、に  
ぎやかにまりました。煙えん突とつから、黒くろい煙けむりが上あがり、トロツコは、  
あちらの坂さかを音おとをたてて走はしりました。

しかし、地中の秘密や、人間の運命は、ひつきよう、だれにもわかるものでありません。一年とたたぬうちに、金持ちは、財産を費いはたしてしまいました。その時分から、いろいろな金や、銅の気のある石が出てきました。

三人の坑夫も、いまここでやめてしまうのは、惜しいものだと思います。

「じゃ、もうあと一ヶ月。」

「あと十日。」

こうして、希望を追って無理の仕事をつづけるうちに、金持ちは支払いができなくなつて、どこへか姿を隠してしまいました。昨日まで、走っていた、トロツコは止まる、煙は、煙突から立



たなくなりました。村は、昔のように、さびしくなりました。村  
 の人たちは不平をいいながら、ふたたびくわを取るようになりま  
 したが、島からきた三人の男は、帰る旅費もなく、いつまでも、  
 山の小舎に寝起きをしていなければなりませんでした。

「兄 弟 こんなめにあうくらいなら、くるんでなかつたな。」

「おれは、いい仕事にありついたらと思つてやつてきたんだに……」

「はやく、旅費だけでもかせいで帰りたいもんだ。」

三本は、顔を見合わせて、こんな話をしていました。そのうち  
 一人が悪い疫病にかかりました。二人は夜も眠らずに看  
 病しましたが、彼らも、感染して、三人は、まくらを並べて

倒れると、苦しみつづけて、遠い故郷を夢に見ながら、とうとう、前後して、死んでしまいました。

村の人たちは、三人の坑夫の身の上を憐れに思いました。その死骸を山にうずめて、ねんごろに吊い、そこへ、三本のなしの木を植えたのであります。

山の上を通つて風は、なしの若木を吹きました。山の上を過ぐる雨は、なしの木の葉をぬらしました。こうして、月日は、たつていったけれど、なしの木には、花が咲きませんでした。

「この木は、花が咲かないな。」と、ここをあるくたびに、村の人はいくたび、木をながめていましたでしよう。

しかし、三人のなしの木は、伸びて、大きくなりました。そし

て、木はあちらの海が、見えるほどの高さになったとき、はじめて、三本とも白い花をつけたのであります。めじろや、ほおじろが、その枝にとまって、明るい海の方の空を見やりながらさえずりました。

三本のなしの木は、夏の末には、いずれもみごとな実を結びました。村の人は、それをとつて食べると、あまり、その味がうまかったので、たちまち、評判になりました。

「この村に、なしの木を植えるべえ。」と、百姓たちは考えつきました。

昔、金持ちの住んでいた屋敷も、荒れはててそのままになっていたが、いつしか、そこにもなしの木の苗は、植えられたのです。

春はるになると、村むらのあちら、こちらに、雪ゆきのような、白しろいなしの花はなが咲さきました。そして、いずれも、夏なつのころにはみごとに実みつたのであります。

「どういうものか、この土地とちは、なしに性しょうが合あうとみえるだ。」  
こういつて、村むらの人ひとは、平へい地ちといわず、山さん地ちといわず、なしの木きを栽さい培ばいして、これこれを名めい産さんにしようと企くてました。やがてこの村むらは、なしの名めい産さん地ちとなりなりました。すると、方ほう々ぼうの村むら々むらでも、金かねもうけのことなら、なんだつて見み逃のがしはしないので、かぎりなく、なしの木きを植うえたのであります。それは、あくの雲くもをつかむような、銅どうや、金きんや、銀ぎんを掘ほり出だすのと、わけがちがつたか  
らです。しかし、このなしも、どこにも、よくできるというので

なかった。ただ北<sup>ほっかい</sup>海の<sup>なみ</sup>波の<sup>おと</sup>音の<sup>き</sup>聞こえるだけの<sup>ひろ</sup>広さにかぎって  
いました。そして、ほかのより、水<sup>みず</sup>気<sup>け</sup>があつて、甘<sup>あま</sup>かつたけれど、  
また、なんとなく、その味<sup>あじ</sup>には、淡<sup>あわ</sup>い哀<sup>かな</sup>しみがありません。



# 青空文庫情報

底本：「定本小川未明童話全集 7」講談社

1977（昭和52）年5月10日第1刷発行

1982（昭和57）年9月10日第6刷発行

底本の親本：「未明童話集5」丸善

1931（昭和6）年7月10日発行

初出：「童話文学」

1930（昭和5）年6月

※表題は底本では、「金《きん》が出《で》ずに、なしの産《う》まれた話《はなし》」となっています。

※初出時の表題は「金が出ずに梨の産れた話」です。

入力：特定非営利活動法人はるかぜ

校正：きゆうり

2020年4月28日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<https://www.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。



# 金が出ずに、なしの産まれた話

小川未明

2020年 7月13日 初版

## 奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail [info@aozora.gr.jp](mailto:info@aozora.gr.jp)

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>  
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。  
<http://tokimi.sylphid.jp/>